

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520410

研究課題名(和文)中世ドイツ叙事文学における表現技法の全体像を解明する

研究課題名(英文)Elucidation of the expressive Technique in Middle High German epic poetry

研究代表者

武市 修 (TAKEICHI, OSAMU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80140242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：1200年前後に宮廷を舞台に繰り広げられた文学は、当時のドイツ語である中高ドイツ語で書かれた騎士を主人公にした騎士による騎士のための文学で、押韻文学なるが故の独特の表現形式が見られる。それとともに今日のドイツ語へと変遷する重要な過程にあり、語学的に見ても興味深い現象が見られる。今回の研究課題の下に当時の散文作品である法書『ザクセン法鑑』に見られる表現形式を、代動詞、除外文、縮約形、否定表現などの観点から詳しく検証し、最後に、中高ドイツ語の『哀れなハインリヒ』の用例と比べて、これまで調べてきた表現形式が中高ドイツ語叙事文学独特のものであることを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：For the medieval poets that have to compose their poems in verse it is very important, how good they make rhyme and rhythm. They make wide use of varying word-forms and grammatical possibilities. Till now I have explored the characteristics of the expressions in the Middle High German epic poetry.

It is the aim of this research to confirm the results of my explorations in comparison with the linguistic expressions concerning the pro-verb *don* (MHG *tuon*), contracted forms of various words and negative expressions in the Middle Low German "Sachsenspiegel". The results of this research were published in five papers, and moreover, reported twice at conferences.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：押韻 代動詞 縮約形 二重否定

1. 研究開始当初の背景

(1) 中高ドイツ語の言語現象については、20世紀初頭 K. Zwierzina などによって精力的に研究が進められ、その後、縮約や音韻短縮について 20 世紀中葉の K. Geißner や Th. Frings などの研究によってほぼ解明されたかのように思われた。

しかし、押韻という制約から中高ドイツ語の特徴を明らかにするという視点は、それ以前に J. Grimm がその過大評価を戒めたこともあり、中高ドイツ語文学において重要な押韻上の技法が、言語史上、必ずしもこの時代の特徴として位置付けられず、ドイツ本国でもこの視点からそれ以上詳細な研究が行なわれなかった。

(2) 筆者は、このような研究の隙間を埋めるべく、中高ドイツ語の主要な叙事文学作品における、動詞 *tun* (今日の *tun*、英語の *do* に当たる) の、先行する動詞の代わりに用いられる代動詞の用法について、すでにドイツの学術専門誌『言語学』に発表していたが、2008 年より科研費の補助金をいただいて、動詞 *lâzen*, *legen*, *ligen*, *sagen* の縮約形と本来の形の使い分けを詳細に検討した結果をドイツの専門誌に寄稿し、また、国際学会で発表してきた。

2. 研究の目的

前回いただいた科研費補助金の課題「中世ドイツ叙事文学に見られる表現技法の解明」で明らかにした、押韻文学たる叙事文学独特の表現技法と見られる現象を、当時の文学作品以外の散文で書かれた作品の表現を調べ、その違いを比較することによって確認し、中高ドイツ語の韻文作品の表現技法の全体像をよりはっきりした形で示すことが今回の研究の目的であった。

3. 研究の方法

(1) 関西大学の独文合同研究室において三十

数年来続けてきた輪読研究会を引き続き行ない、中高ドイツ語叙事文学の最高傑作とされる『パルツィヴァール』を徹底的に厳密に読むことによって、中高ドイツ語原典の正確な読解力をさらに磨きつつ、H.-W. Eroms 先生、R. Bergmann 先生などのドイツの専門家を訪ね、意見交換し難解個所の理解を深めながら最新の情報を得る。

(2) 『ザクセン宝鑑』など押韻文学でない散文作品を辞書と文法書、現代ドイツ語訳などを参照することによって、正確に読み進め、そこに見られる特徴的な表現の用例を整理する。

4. 研究成果

(1) *Der Wandel der Gebrauchsweisen vom Verb lâzen (nhd. lassen) vom Mittelhochdeutschen zum Frühneuhochdeutschen* は、ポーランドのジェロナグラ大学において行なわれた国際学会における研究発表が、後に一冊の書物にまとめられ、そこに分担執筆したものである。内容は、中高ドイツ語の動詞 *lâzen* (今日もっぱら使役の助動詞として用いられる *lassen*、英語の *let* に当たる) が、本動詞としておよび助動詞として如何に用いられていたかを、中高ドイツ語から初期新高ドイツ語まで辿るため、従来の研究結果にさらに、13 世紀の英雄叙事詩『クードルーン』と 14 世紀の散文作品である『ベーメンのアッカーマン』の用例分析を加え時代的変遷を見たものである。このような視点での研究は本国の斯界でも欠落しており、その必要性が認識された。

(2) *Wandel vom Ahd. über das Mhd. bis zum Frühnhd. - einige sprachliche Phänomene* は、国際ゲルマニスト会議で口頭発表したものが報告集として一冊の書物にまとめられ、それに分担執筆したものである。内容は、まず、縮約という言語現象を紹介し、具体例として動詞 *legen*, *ligen*, *sagen*

の縮約形が押韻文学の中で、如何に本来の語形と使い分けられているか、次に tuon と machen の用例の頻度から tuon が主として押韻に、また、代動詞としても頻りに用いられていることを示し、最後に、14 世紀の散文作品『ベーメンのアッカーマン』ではそれらの用法がほとんど見られないことに触れ、上述の現象が、中高ドイツ語押韻文学の大きな特徴であると結論付けた。

『ベーメンのアッカーマン』との比較はこれまででなされたことがなく、新しい切り口で中高ドイツ語押韻文学の表現技法を示すことができた。

(3)これまで詳細に調べてきた中高ドイツ語の言語現象が押韻文学と深くかかわっていることをさらに明確に示すために、ここからは同時代の法書である中世低地ドイツ語で書かれた『ザクセン宝鑑』を取り上げる。法書とは、例えば今日の六法全書などのように法律の条文を記した法典ではなく、また、独自の体系に基づいたものでもなく、一私人によって自由な連想に従って包括的に散文で描写された文学的作品である。

この法書には、古典古代から中世に受け継がれた修辞法の伝統に則り韻文で表わされた序文が添えられている。そこで、第一稿(『ザクセン宝鑑』に見られる表現技法

中高ドイツ語叙事作品との比較から その 1) ではこの韻文の序文を取り上げ、除外文、縮約形、曲言法(控え目に言うことで却って表現効果を高めたり、否定を用いることで肯定を表わしたりする、修辞法上の文彩のひとつ)について明らかにした。用例分析の結果明らかになったのは、縮約形を示す語はこの低地ドイツ語の作品と高地ドイツ語の叙事作品では違いがあるものの、縮約という現象はともに見られること、除外文や曲言法にも共通するところがあることであった。

次いで、第二稿(『ザクセン宝鑑』に見られる表現技法 中高ドイツ語叙事作品との

比較から その 2) では否定表現を取り上げた。まず、H. パウルの『中高ドイツ語文法』および G. F. ベネツケ、W. ミュラー、Fr. ツアルンケの『中高ドイツ語辞典』の記述を総括して、中高ドイツ語叙事作品全般に現われる否定表現をさまざまな作品から詳しく紹介し、否定辞のみによる否定、否定語単独による否定、否定の重複の観点から整理して示し、『ザクセン宝鑑』の序文のすべての用例を分析した。その結果、韻文である序文には反語的な否定など中高ドイツ語と共通する現象も多少は見られるものの、否定辞が否定を表わさず、冗語的に用いられる用例はないなど、文法的により明確な語法が目立つことが見て取れた。

第三稿(中高ドイツ語叙事作品に見られる表現技法 『哀れなハインリヒ』を手がかりに 『ザクセン宝鑑』の表現と比較して) では、具体的な比較の対象として、ハルトマン・フォン・アウwerk『哀れなハインリヒ』を取り上げ、代動詞、縮約形、否定に関して、『ザクセン宝鑑』の散文で書かれた本来の部分であるラント法の表現と比べた。中高ドイツ語諸作品では動詞 tuon が頻りに用いられ、押韻に利用されたが、tuon に当たる低地ドイツ語 don の、序文にはなかった代動詞用法がこの法書の散文の本文には 2 例あり、これは当時低地ドイツ語でも見られた共通の言語現象であったことが分かった。

縮約形に関しては、中高ドイツ語作品に頻出し、『哀れなハインリヒ』にもはっきり認められる、動詞 legen, sagen, lāzen などの巧みな使い分けはこの法書には 1 例もないが、動詞 stan, gan などに、中高ドイツ語作品には現われない短縮形が見られる。このことから、縮約形は押韻とリズムのために大いに利用される一方、縮約という現象には方言的な相違もあったことが分かる。『ザクセン宝鑑』にも韻文で書かれた序文に散文で書かれた本文にはない verstan という縮約形が押

韻に用いられていることから、韻を踏むために詩人はいろいろな表現の可能性を利用することが理解できる。

否定に関しては、『ザクセン宝鑑』本文では否定辞のみによる否定は 34 例の除外文以外にはわずか 4 例と、例外的であり、主文、副文を問わず否定辞と否定語による二重否定がふつうである。これに対し、『哀れなハイブリヒ』ではリズムを整え、行末で押韻するために否定辞が加えられたり省かれたりと、押韻文学なるが故の現象が見られる。さらに、冗語的否定や反語的否定など、文学作品ならではの微妙な否定表現も多く、表現がきわめて多様である。

これらの調査結果から、これまで詳細に調べてきたさまざまな表現は、やはり、脚韻文学たる中高ドイツ語作品独特の技法であると結論付けることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

武市修、中高ドイツ語叙事作品に見られる表現技法 『哀れなハイブリヒ』を手がかりに 『ザクセン宝鑑』の表現と比較して、関西大学『独逸文学』(査読有) 59号、2015、39 - 76

武市修、『ザクセン宝鑑』に見られる表現技法 中高ドイツ語叙事作品との比較から その 2 否定表現について、関西大学『独逸文学』(査読有) 58号、2014、1 - 32

武市修、『ザクセン宝鑑』に見られる表現技法 中高ドイツ語叙事作品との比較から その 1、関西大学『独逸文学』(査読有) 57号、2013、53 - 75

OSAMU TAKEICHI, Wandel vom Althochdeutschen über das

Mittelhochdeutsche bis zum Frühneuhochdeutschen: Einige sprachliche Phänomene. In: Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit (査読有), Bd. 17, 2013, S. 77-81

OSAMU TAKEICHI, Der Wandel der Gebrauchsweisen vom Verb *lâzen* (nhd. lassen) vom Mittelhochdeutschen zum Frühneuhochdeutschen. In: Geschichte und Typologie der Sprachsysteme (History and Typology of Language Systems) (査読有), 2011, S. 355-364

〔学会発表〕(計 2 件)

武市修、中高ドイツ語叙事文学の表現技法、京都ドイツ語学研究会、2015年5月16日、キャンパスプラザ京都 京大サテライト講習室(京都市)

武市修、『ニーベルンゲンの歌』から『ザクセン宝鑑』まで 私の研究を振り返って、関西大学独逸文学会、2014年11月8日、関西大学(大阪府吹田市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武市 修 (TAKEICHI, Osamu)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80140242